法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-13

カント没後二〇〇年と生誕二八〇年記念 国際カント学会(於カリーニングラード)報告

SUGASAWA, Tatsubumi / 菅沢, 龍文

(出版者 / Publisher)
法政哲学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Bulletin of Hosei Society for Philosophy / 法政哲学
(巻 / Volume)
1
(開始ページ / Start Page)
49
(終了ページ / End Page)
58
(発行年 / Year)
2005-06
(URL)
https://doi.org/10.15002/00008209

Hosei University Repository

カント没後二〇〇年と生誕二八〇年記念

国際カント学会（於カリーニングラード）報告

菅沢龍文

二〇〇四年四月二二日から二四日にかけてロシアのカリーニングラード州州都カリーニングラードで「西と東の間のカント」というテーマで第九回国際カント学会が開かれた(*)。本学会はこれまでロシアを中心に近隣諸国で行われている国際カント学会と思われる。しかし今回の学会はカント没後二〇〇年と生誕二八〇年との記念を兼ねたもので、近隣諸国を越えたグローバルな学会であった。

学会初日の四月二二日はカントの誕生日にあたる。カリーニングラードは第二次世界大戦中まではケーニヒスベルクと呼ばれるドイツの都市であった。この都市でカントは生まれ、活躍し、亡くなった。カリーニングラードに名称が変わってからは、実は都市の実態は名称ばかりか住民の点でも変わり、大戦直後に大多数のドイツ人はケーニヒスベルクを去り、そのあとのカリーニングラードにロシア人が住み着いている。さらに都市の景観も戦前のカリーニングラードを偲ばせるものは城や大学の建物をはじめほとんど残っていない。かろうじて大聖堂は残っているが、いまだに修復が終わっていない。また、プレーゲル河の中洲にかかっていた一筆書きで有名な橋も一つを除いて全部無くなっている。このような変貌の理由は、大空襲で都市は破壊されつくし、その後の再建がかつてのドイツ人の都市の景観を無視してなされたからである。

今回の学会の主催・共催者として名を連ねているのは、カリーニングラード国立大学、ロシア・カント協会、バルト海国際社会科学協会、ドイツ・カント協会（社団法人）、

Hosei University Repository

ベルリン・ブランデンブルク科学アカデミーであり、今回の学会には「ツァイト基金エーベリン&ゲルト・ブツェリウス」の財政的援助があった。

参加者の国別人数は二二日に配布されたリストから読み取ると、ドイツから二五人、イギリスから四人、フランスから一人、ベルギーから一人、オランダから一人、スウェーデンから一人、スイスから一人、アメリカ合衆国から四人、カナダから一人、ブラジルから一人、日本から二人、ロシアからは、カリーニングラードが四三人、サンクト・ペテルスブルクが一五人、モスクワが一八人、ロシアのその他の地域からは二〇人、ウクライナからは三人、リトアニアからは一人、エストニアからは一人、ポーランドからは一人、フィンランドからは一人、ブルガリアからは一人、不明が一人である。したがって都合一八ヵ国、一四七名(そのうちロシア以外は五一名)になる。ただし現住地ではなくて国籍で言えば中国人やイタリア人もいた。なお、スコットランドのエディンバラから哲学者カントと血のつながりがあるというカント氏(Everard Kant)が参加した。

大会前日の四月二一日の午後五時にカリーニングラード大学の博物館で画家スミルニアジン夫妻の展示会「カント・ケーニヒスベルク・カリーニングラード」会場のオープニングが催された。画家の描いたカントやケーニヒスベルクの景観などが飾られた部屋で展示会にかかわる挨拶および懇親会のあとに男声合唱団が登場して力強い歌声が会の最後を飾った。この大学の建物の正面から出ると前庭の斜め左手にカントの立像が立っている。これはケーニヒスベルク出身で第二次世界大戦後にドイツで活躍したジャーナリストのデンホッフ伯爵夫人(Marion Grafin Dönhoff)らの努力によって一九九二年に立てられたものである【写真1】。

カントの立像はこれが最初のものではなくて、設置当初のカント立像はラウホ(Daniel Rauch)の作品(一八五五年)を元にベルリンで鋳造された立像(一八五七年)で、ステューラー(August Stüler)設計の記念碑の真ん中にそびえていた。これは一八八五年に城の発掘と道路設置のために、新

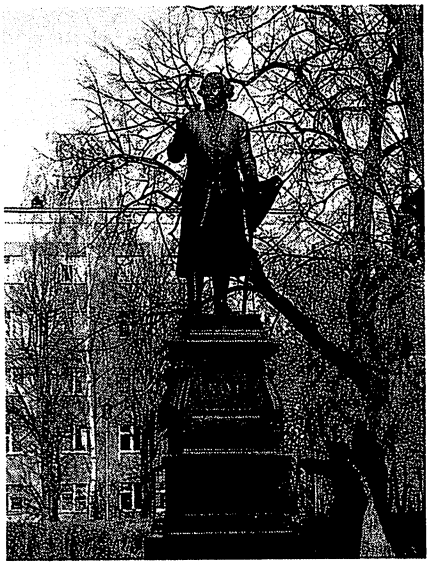


写真1　カント立像

Hosei University Repository

大学（一八五六-六二年建設）からみて前方右手（南西）の場所に移設され、第二次世界大戦で消失したと考えられる。

今回の学会会場となったのは、市中心部にある大学から北方へ徒歩で三十分ほど離れたカリーニングラード国立大学の新しい純白の建物であった。開会直前の会場のステージには解説の声とともにプロジェクターで大きく市の宣伝の写真が次々と映し出され、カントや昔のケーニヒスベルクにまつわることから現代のプーチン来訪に至るまで様々紹介されていた【写真2】。また、英語とドイツ語のどちらかの通訳を聞けるヘッドホンが用意されていた。

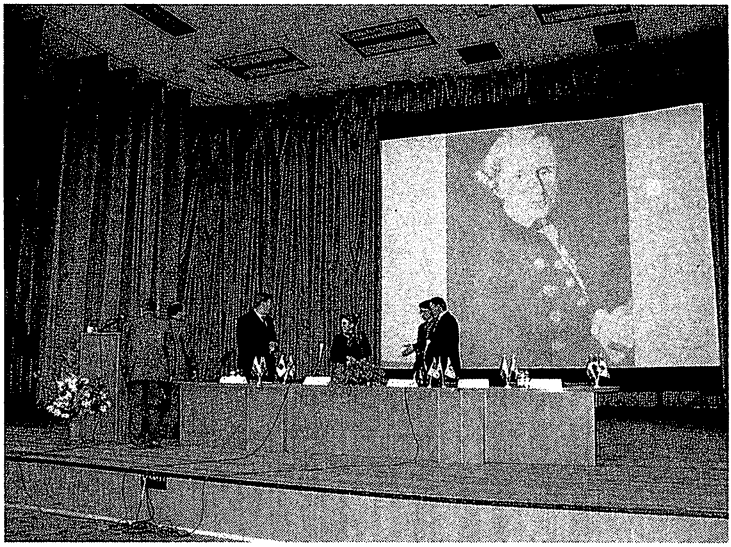


写真2　会場ステージ

ステージには主催大学のブリュシンキン（Wladimir Brjuschinkin）教授を中心に左右に来賓が並んで座っていた。まず、ブリュシンキン教授の開会の挨拶があり、その後カリーニングラード大学学長クレムシェフ（Andrej Klemeschew）の祝辞、カリーニングラード州知事エゴロフ（Wladimir Egorow）の祝辞、カリーニングラード州議会議長ニキチン（Wladimir Nikitin）の祝辞、カリーニングラード市市長サヴェンコ（Jurij Sawenko）の祝辞が続き、さらにロシア連邦・連邦議会・連邦評議会・議長ミロノフ（Sergej Mironow）の名前での祝辞の代読がなされた。

これら一連の祝辞の後にドイツ・カント協会会長マンフレート・バウム（Manfred Baum）の講演「二百年後のカント」がなされた。その内容はカントの現代的意義にかかわる今大会の基調講演と呼ぶべきものであった。その主要点を以下に紹介する。（筆者は比較的鮮明な録音をとっていたが、関西学院大学の河村克俊教授から原稿をいただくことができたので、これを活用させていただいた。丸括弧内

Hosei University Repository

で引用文の後に記されたAとBに続く数字はそれぞれ『純粋理性批判』初版と第二版のページ数を示す。同様にAAに続くローマ数字とアラビア数字はアカデミー版カント全集の巻数とページ数を示す。）

＊　＊　＊

カント哲学の名宛人はカントの時代の人類だけにとどまるものではない。今回の学会もカント哲学の現代への影響の一端を示すものである。カントが説く啓蒙は、自ら考えることに本質がある。カントは自分の理性を私的（privat）にではなくて公的（öffentlich）に用いることを重視した。またカントは生得的で譲渡不可能な人間性の権利を確立した。ところで啓蒙には立法を公的に批判する自由が必要である。したがって歴史的過程としての啓蒙の目標は将来に人類社会の法的体制を築くことである。さて啓蒙の時代は同時に「本来の意味の批判の時代」（A XI Anm.）である。それゆえカントの批判哲学は優れて啓蒙の哲学なのである。

カント研究の歴史は盛衰の繰り返しとさまざまな流行の歴史であり、一つではない多数のカント主義が著者カントとその著作とになり代わって行う代理業務の歴史である。それにもかかわらず、交代して現れる哲学史家たちは、この哲学そのものの成果はどこにあり、これほど多くの時代と国々の哲学する者たちに対して証明された魅力は何に基づいているのか、と自問した。

カントは自分の要求をこの要求の歴史的相対性を同時に意識しつつ次のように掲げている。「批判哲学が、自分より以前にはそもそもまだ哲学は全く存在しなかったような哲学として予告されるならば、批判哲学は、自分自身の計画に従って一つの哲学を企てるようなすべての人が為したし、為すであろうし、それどころか為さねばならないこと以外の何事もなさないのである」（AA VI 207）と。なぜなら、すべての人は、一つの哲学しか存在しえないということから出発しなければならないからである。

カント哲学の中心問題は形而上学と批判との関係である。カントによれば、人間が理性的存在者とみなされるかぎりで、形而上学は人間学的な定項（Konstante）である。形而上学が継続するかぎり批判の必要性も継続するのであり、「批判によって純化された形而上学」（B XXIV）という課題が存続する。ところで、五十年前にユリウス・エビングハウスは、カントが哲学者たちの間で哲学することの必須の前提とみなされた時代は過ぎ去った、と述べた（vgl. Ebbinghaus, Julius: *Gesammelte Schriften* Bd. 3, Bonn 1990, S. 151.）。しかし今回の学会は特殊な種類の公的な理性使用のためのフォーラムであり、そこではカント哲学の証明と成果の適切な理解と批判的評価が諸論拠をもって争われる

Hosei University Repository

のである。形而上学と批判によって規定された哲学概念はカントに固有なものであるが、このような哲学把握には現代においてそれほど多くの追随者はいない。しかし、アプリオリな綜合判断の可能性を論じないような哲学は、独立した探究領域を持ち得ないし、学問性へのどんな要求もなしえない、ということが示されうる。カント哲学は私たちが自分で哲学するということを練習するために歴史によって予め与えられた試みである。

相対性理論や量子物理学によってカントの自然の形而上学に対する異議が申し立てられる。また、非ユークリッド幾何学の発見により、カントの数学論とその数学論における構成という根本概念が幾重にも維持できないものとみなされる。これらの問題と困難についての現代にいたるまで行われている議論は決着のついたものとはみなされない。しかしカント通のエビングハウスともあろう人が五十年前に、カントの『形而上学的原理』は二十世紀には色あせた書物であると主張したばかりか、カントが『オプス・ポストトムム』で自ら述べているように見えるように、経験の第一類推と第三類推の証明には、質料的な実体を考えている結果、「誤りが入り込んでいる」にちがいない、と主張した（vgl. *a.a. O*, S. 162）。

カントの実践哲学の諸成果にはとりわけ実践哲学そのものの概念のカントによる新しい規定が属している。自然原因としての人間の意志が実践的な諸法則に自主的に支配されるのは、この諸法則が道徳的な諸法則として自由概念を基礎に置く場合だけである。これは、少なくともプラトンとアリストテレス以来の道徳哲学が幸福概念を出発点に置いたのと異なる。

形式論理学のカントによる構想に関しては、概念と直観との対置というカントの教説が、カントの諸『批判』を理解するための基本的な前提である。カントは判断において諸概念を綜合的に統一するすべての機能を一つの原理から実際に証明することはなかった。このような導出をカントが拒んだので、クラウス・ライヒによるこの導出の天才的再構成の後になってもカントの判断表の完璧性がいまだに争われている。

カントの美についての教説は美感的判断のカントによる新しい規定から生じている。カントは、経験主義の理論および合理主義の理論と対決して、美しいものを快適なものと善いものから境界づけることを試みた。これにより認識されたことは、美は感性的・理性的な二重の人間本性において、人間自身に相関してのみ考えられうるということ、美はたしかに「理念の感性的な映現」ではないということである。

カント哲学の現代性はとりわけ公法に関するカントの教説に示されている。カントの法論は、カントの道徳哲学一

Hosei University Repository

般と同様に、形式主義的とみなされる。これについてマックス・ホルクハイマーは次のように述べている。「カントの形式主義は豊かな内容をもつのであって、この形式主義からすべての個人への尊敬、万人の等しい権利、共和国、人類の正当な状態が生ずる」(Horkheimer,Max: Gesammelte Schriften Bd. 7, S. 170) と。もちろんカントの法哲学は、あらゆる哲学と同様に、誤用されうる。たとえば、人間性の権利の毀損に抵抗するために一国の指導によってなされる軍事的暴力があり、これが正当化される場合、カントによれば諸国家間での唯一合法的な暴力使用は世界の平和的秩序をもたらすためのものである。このことを忘れてしまうならば、カントの法哲学は誤用されうるのである。

こうしたカント哲学のもとで燃え上がるだろうあれこれの争点によって心を揺り動かされるのは、この人類の教師に恩恵を被っているものが何であるかを知っていると信ずる人々だけである。

＊　＊　＊

バウム教授の講演が終わってから十五分の休憩後にロシア・カント協会会長カリニコフ (Leonard Kalinikow) が「ロシア哲学におけるカント」という演題で講演した。この後すぐに引き続きブラジル・サンパウロ大学教授ローデン (Valerio Rohden) が「カントの実践的独我論批判」という演題で講演した。ローデン教授は二〇〇五年九月の第十回国際カント学会・開催大学(サンパウロ大学)代表であった。これですでに午後一時を過ぎており、そのまま全員で招かれて市内のレストランで昼食をとりバス三台を連ねた団体でカントの墓参を行った。カントの墓は大聖堂の北東角に

写真３　大聖堂の北面東隅のカントの墓

墓がこの姿になったのは 1924 年のことである。それまでの変遷については、『理想　特集　シェリング没後一五〇年』No. 674 理想社 2005 年 3 月、143-146 ページを参照。

Hosei University Repository

立っており、ここで献花式を行った【写真3、大聖堂北面東隅にあるカントの墓】。この日はめずらしく空は青々と晴れ渡っていた。大聖堂の隣には旧アルベルティーナ大学が第二次大戦まで存在したのだが、今はその跡地に記念碑が残るのみであった【写真4】。

献花式の後に、バスでカントの両親の家があった跡地にあたる場所に向かった。そこの建物の壁には今回新たに記念プレートが設置されており【写真5】、これのオープニング・セレモニーが行われた。その後はケーニヒスベルク

写真4　旧大学の跡地に立つ記念碑

プレーゲル河の中洲は、大聖堂や旧大学の他にも多数の建物があったのだが、現在は大聖堂を除いて何もなく、木々の間を散策できる公園になっている。

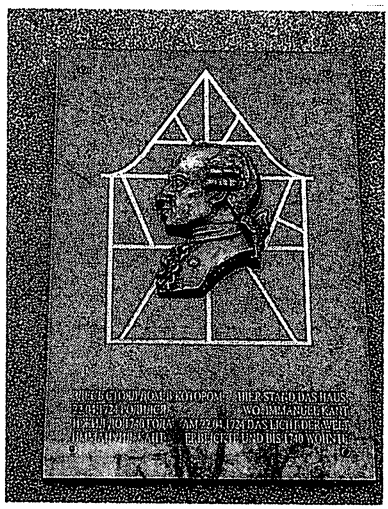


写真5　カントの生家跡の記念プレート

とカリーニングラードの両方に詳しいバスガイドの解説のもとで市内をめぐり、最後にドイツ・ロシア会館で懇親会を行いこの日は終わった。

翌二三日と二四日には研究発表が行われた。研究発表セクションとしては次の五つがあった。

1　多様な文化におけるカント哲学受容
2　カント理論哲学における超越論主義とアプリオリズム
3　カント哲学における形式論理学と超越論的論理学
4　カント実践哲学における普遍主義と形式主義
5　カントにおける人間・文化・生命

以下それぞれのセクションでプログラムされた発表のテーマを見ていく。

Hosei University Repository

「1　多様な文化におけるカント哲学受容」では、白ロシア（現ベラルーシ）、リトアニア、ポーランド、オランダ、オーストリアといった国々についての報告があり、新カント主義のドイツ、ロシアへの影響、カントの「信仰と理性」論のドイツ、ロシア、アングロアメリカ・カント研究への影響、スカンジナビアの平和運動とカント、ポーランド問題とカント、ベルジャーエフとカント、ソルヴィョフとカント、などである。

「2　カント理論哲学における超越論主義とアプリオリズム」では、客観の制約としての主観的なもの、現代科学方法論におけるアプリオリズムと経験主義、テクノクラシーの超越論性とアプリオリズム、純粋理性批判、厳密な学としての形而上学、超越論的哲学の方法、批判的形而上学、真理の対応説、把捉の総合とアプリオリな形式の生成、空間・時間論、ヤコービとカント、などが取り上げられた。

「3　カント哲学における形式論理学と超越論的論理学」では、批判的思考の歴史と現在、形式論理学の限界、現代の言語表現でのカントのアンチノミー論、超越論的論証、超越論的論理学、アプリオリな概念、論理学と必当然的な学の基礎づけ、否定判断の自律、論理的理念などが論じられた。

「4　カント実践哲学における普遍主義と形式主義」では、定言命法における許容可能なものと義務、カントの虚言論、虚言と常識、自由の範疇表の演繹問題、開化・文明化・道徳化、カントの刑罰正義、カントの黄金律批判、現代的な事象の倫理とカント、ハーバーマスとカント、ホッブズ・ルソー・カント、フィヒテとカント、などがテーマとして取り上げられた。

「5　カントにおける人間・文化・生命」では、カントのコペルニクス的転回の諸成果、カント美学における社会的人間学、カントの人間学的プロジェクトの実行可能性、カント社会哲学の普遍主義、カントの批判的歴史哲学、判断力の問題、構想力の問題（ハイデガー、アーレントとカント）、カント自然哲学の文化的基礎、物質の自己組織化としての生命、オプス・ポストウムムにおける有機体概念、カント全集編纂にみるカントのマニュスクリプト、といったテーマの発表がなされた。

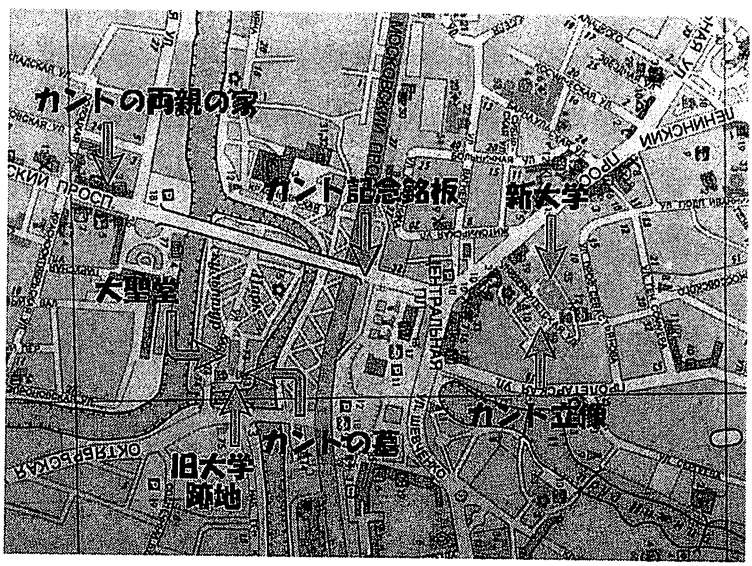
二四日の閉会式では二つの最終講演がなされた。そのひとつは、コレスニコフ（Anatolij Kolesnikow）の「比較研究にみるカント」であり、もうひとつは、キッチャー（Patricia Kitcher）による「統覚の二つのアスペクト」であった。

なお、最後に有名なカント記念銘板の所在について触れておく。この記念銘板は一九〇四年にカント没後百年を記念して作られたもので、カントの『実践理性批判』の結語にある次の言葉が彫られていることで知られている。「よ

Hosei University Repository

り多くより長く熟考すればするほど、二つのものが常に新たなる増大する感嘆と畏敬の念でもって私の心を満たす。それは、わが上なる星々のちりばめられた天空と、わが内なる道徳法則とである」。この銘板はカリーニングラードとなる前のケーニヒスベルクに存在したが、第二次世界大戦で紛失し、いまだに発見されていない。そこでカリーニングラードではカリニコフ教授らの尽力によって一九九三年に新たにドイツ語とロシア語で先の文句を彫った記念銘板が作られた。これはプレーゲル河の中洲の上を高架の橋になってまたぐ道路の北東部から下に降りる階段へ向かう角の壁にはめこまれていた【写真6】(＊＊)。

写真6　カント記念銘板



カリーニングラード中心部の地図（右が北）

＊　本学会はターグング(Tagung)と称している。しかし五年ごとに開催されるもうひとつ別の第九回国際カント学会がすでに二〇〇〇年に開かれている。こちらはコングレス

Hosei University Repository

(Kongress)と称している。両者を区別するためには、本学会を「国際カント会議」として訳し分けるのが適切だと思われる。ただし今回は、研究発表主体の学術会議という内容からみて「学会」という表現を用いた。

＊＊　同様の記念銘板は他に二つある。ひとつは一九〇四年に制作されたオリジナルであり、現存しない。もうひとつは一九五五年にドイツのドゥイスブルク（ケーニヒスベルクの代理都市）の市庁舎の壁に作り付けられたもので、これは現存する。

付記　竹内昭法政大学教授の次の文献は、ソ連時代のカリーニングラードにおけるカント受容を歴史的にまとめられていて注目すべきである。竹内昭「ソ連時代のカリーニングラードにおけるカント受容」法政大学教養部『紀要』第一〇〇号・人文科学編、一九九七年二月、一五～四五頁。